

所 陵

No. 4

関西大学考古学等資料室彙報

昭和56年11月1日発行



人物埴輪（茨城県出土）

目 次

模写とスケッチーヨーロッパの博物館・美術館で考えたことー	2
ディル・スワットの博物館	3
本山彦一翁と考古学ーその3ー	4
オシリス神小像	6
桂離宮昭和大修理の土壁調査について	7
河内国府遺跡の旧石器	8
続インカ・マヤと飛鳥の石造物	9
パプア・ニューギニアの民俗資料	10
資料室資料紹介	11
編集後記	12

関西大学考古学等資料室

〒564 大阪府吹田市山手町3の3の35(06-388-1121)

模写とスケッチ —ヨーロッパの博物館・美術館で考えたこと—

横 田 健 一

ヨーロッパの美術館で非常に目立つのは、名画の前にイーゼルを立てて、模写をしている人が非常に多いことである。これは日本の美術館では、ほとんど見られないが、それは日本の美術館、博物館の多くが写真や模写、複製を禁止しているからかも知れない。

パリのルーヴル博物館では、いつも数十人が模写をしている。

一九六四年三月四日、私はスペインのマドリードに行った。すぐ長年あこがれていたプラド美術館へ足を向けた。そこで熱心に模写を行っている壮年の日本人を見かけた。名刺を交換して話しあうと、久留米市の櫛原に家があるという、藤田吉香氏であった。櫛原には私の義兄（妻の姉婿・久留米医大外科教授）が住んでいて、何度か訪れて、よく知っているところだ。

つい、なつかしくて、ゆっくり話したくなり、今夜の夕食を一緒にしましょうということになった。藤田氏の案内で中華料理店で、スペイン風に遅い夕食を夜の十時すぎからとり、十二時ごろまで話しこんだ。模写というものは大変な時間のかかるもので、一日に3.3cm位しか進まぬという。大作になると、何年もかかるらしい。

藤田氏も、家族を日本に残して二年以上もすわりこんでいるようだった。

帰国して数年後、新聞で、藤田氏が安井曾太郎賞を受賞されたことを知った。また展覧会で氏の作品を何度か見た。昨年には、京都の高島屋で氏の個展が開かれて拝見した。

氏の作風はスペインで模写されていた名画とは違って、きわめて近代的な洗練されて、明るい、清潔な画で、豊かな色彩と細く強い線、それも直線が印象的である。しかし、その作品の背後には、長年模写で鍛えられた習練がものを言っていることは、確実である。

およそ模写という習練法は、書道において早くから行われて来た方法である。法帖といわれる古人名家の書道、とくに拓本のそれを見て、その通りに描くのである。日本画においても、古人や師匠のお手本を見ながら稽古するのが、普通のやり方

である。

有名になった書家は、多くの古来の名品を模写するうちにそれらの骨法を体得し、それに自己独自の工夫を加えて、個性的な作風を完成するのである。



模写する男（講談社：世界の博物館10より）

考古学においても、藝術とは全く目的も方法も違うが、学問の基本として、住居地や古墳でも、土器や金属器でも、物指やキャンパスを使って実測図を正確に作製する。多数の土器を実測しているうちに、層序が違えば、どのように、各時代の文様が変遷して来たかを知ることが出来るようになる。こうした各時代様式を体得すると、現場で発掘中に一片の土器の破片をみても、その製作年代を推定することができる。

しかし、博物館では、よほどの便宜がなければ、実物を手にとって実測したり、拓本をとったり、写真をうつすことは不可能である。

まして忙しい旅行中に、多くの博物館の遺物を見てまわらねばならない時には、とても実測はできない。しかし、これだけは、なんとか記録にとどめたいと思う時がある。

そうした場合には、スケッチをするのがよい。

スケッチ・ブックに、あらましの図をとる、とくに注意すべき部分は、入念にスケッチをする。そうすると、その部分の構図や線を覚えることができ、他の地にある作品と比較できる。私は学生諸君に、旅行にスケッチ・ブックの携行をすすめたい。

ディル・スワットの博物館

網 干 善 教

パキスタン (PAKISTAN) の国境の町ペシヤワル (PESHAWAR) から、アレキサンダー侵入時の都であった「青い蓮華の町」と呼ばれるチャールサダ (CHARSADDA) を経て、七曲急峻マラカンド (MALAKAND) 峠を登ると比高約千米のスワット (SWAT) 河の流域に至る。ここは「スワット溪谷」と呼ばれ、日本でいえば信州千曲川流域の風情に似る。川に沿う道路を走ると背高いポプラ並木が実に美しい。のどかな沿道の風景とうらはらに、ところどころにアフガン難民のキャンプのテントが見える。

この地域は「ガンダーラ (GANDHARA) 北辺」あるいは「北部ガンダーラ地域」と呼ばれる地帯であり、さらに奥に進めばディル (DIR) を経てチトラル (CHITRAL) に通る。

今年になって7月と9月の2回この地を訪ねることができた。ここにはシンガダール (SHINGERDAR) の大塔、ガリガイ (CHĀLIGAI) の磨崖仏、ブトカラ (BUTKARA) の寺院跡などがある。

スワット地方には2つの博物館がある。マラカンド峠を越えてスワットに向う途中、ディルに入る分岐点がある。ここにはスワット河にかかる鉄橋があって、検問をうける。橋を渡って約1.5kmほど行くとチャクダラ (CHAKDARA) というところがあり、そこに小さな博物館がある。入口には“DIR MUSEUM, CHAKDARA”という標示が掲げられている。

館内は前後2室にわかれ入口側の第1室は民族楽器、衣服、耳・腕飾、鉄砲などの展示品がある。

奥側の第2室には主として土器や仏教関係の遺物などが展示されている。土器は量は少ないが、日本の弥生後期の土器と非常に似たものがある。仏教関係の展示物としてはこの地方で出土したガンダーラ様式のレリーフやストッコーが主であり、なかでもイギリスの兵隊が掘りだして寄贈したと

いう。6～7世紀の初輪法印像の彩色のテラコッタのレリーフは見事なものである。またストッコーは7世紀代の遺物が多い。



スワット博物館

このディル博物館は規模こそ小さいが、第2室の展示品は、この地域の出土品を陳列した地域博物館として特徴をもっている。

ディル博物館から引返し、検問をうけた橋を渡って左に折れ、スワット河に沿い、ポプラの並木路を北に向って走る。途中、高畑越しに有名なシンガダールの大塔をみる。塔は7世紀に拡張整備したもので、高さ27m、直径13mの伏鉢形の大塔である。

そこからさらにすすむと道路の右側にガリガイの磨崖仏がある。定印を結び、結跏趺座の如来形の仏像である。

スワット地域の中心の町、ミンゴラ (MINGORRA) にはスワット博物館 (SWAT MUSEUM) がある。落着いた石造りの建物である。

先ず中央のロビーにあたる場所に仏足石が展示され、また壁の片面ケースにはレリーフの仏像彫刻が展示されている。さらに左側の第2室からその奥の第3室にはガンダーラ様式の仏像、レリーフをはじめ、ストッコーの仏像がところ狭しと展示されている。またロビーの裏側にあたる1室には主に土器類などが展示されている。何れもこの地域から出土したもので、地域博物館としてまとまった資料の展示であることに特徴がある。

私は多量の展示品のうち、関心をもったものの1つに三尊形式の源流とみられる磚があった。ガンダーラ様式の作風がみられる三尊仏の資料は仏教美術の伝播を考える上で貴重なものと考えられる。



ディル博物館

本山彦一翁と考古学 ……その3…

角 田 芳 昭

……長門鑄銭址発掘……

本山彦一翁の3大発掘のうち、今回は長門国下関市長府町の鑄銭址発掘について述べてみたい。

現在本学考古学資料室に所蔵されている長府町^{ちづば}出土の鑄銭関係資料は錢範140点、埴塙9点、轆口10点であり、「大正10年8月発掘」と本山翁筆で書かれた紙片がある。そこでこの資料研究調査のため網干、亀井教授とともに現地を訪れ、諸々と調査した結果、多大の成果を納めた。

わが国で最初の貨幣は和同開珎^{ほう}であるといわれる。元明天皇の和銅元年(708)1月武蔵国秩父郡より和銅を献じたことにより、2月催鑄銭司をおき、5月はじめて銀銭を発行、7月近江国で銅銭を鑄、8月これを発行した(続日本紀)。当時(奈良時代)は唐の模倣文化といわれる如く、この銭も唐の「開通元寶」を模したものと思われ、両者を比較すると、形状、銭文、輪郭、方孔など類似しており、銭文も中央上部より右へ和同開珎と廻読し、唐の「開通元寶」銭と同様の廻読であり、「珎」も「寶」の文字の一面を生かした略字と思われ、「珎^{ほう}」と読むのが正しいと推測する。

この和同銭の鑄造地としては、山城、近江、河内、播磨、周防、長門、大宰府、武蔵などが知られているが、特に著名な遺跡としては、山城国相楽郡加茂町と長門国下関市長府町長門鑄銭所跡で、同所より錢範、埴塙、轆口、銅鑄滓などが多数出土している。

調査のため長府博物館を訪れ、諸々と鑄銭址関係資料を見学させていただいた折、伊秩洋子学芸員より次のようなお話を伺った。関西大学所蔵の長門鑄銭関係資料は、古銭研究家として知られる佐野英山氏が、本山彦一翁の依頼を受けて発掘

したのであると。

その時の発掘日記を佐野英山氏より借り転記した記録があるので、後日送付すると語られ別れた。その資料が届いたので、ここに紹介してみたい。

佐野英山氏の発掘日記に次の如く記されている。



史跡 長門銭鑄所跡

「…大正10年7月の頃、大阪毎日新聞社長本山彦一氏の台湾に赴かるや、途に馬関に於て、横山健堂氏に邂逅せらる。横山氏告ぐるに、長府に於て、和同銭鑄造の遺跡ある事を以てせらる。横山氏当時は毛利家の為に、史籍調査に従事せられつつあるの士なり。本山氏は人も知る当世有数の好古家にして斯道の調査研究に貢献せらるる所尠からず。故に一度此事を耳にせらるるや、必ず是が遺跡を発掘調査せん事に決意せられ、直ちに事の進行を横山氏に委嘱せられたり。今度8月横山氏より準備成るの報あり。本山氏即ち余に命ずるに、代つて彼地に赴き、之れが発掘に従事せん事を以てせらる。余や年来、氏の恩顧を受ける事頗る厚し。且つ事の最も自己の熱望せる所たり。即ち勇躍命を奉じて之れに赴く。」…そして続いて本邦和同銭鑄造の歴史等を述べている。

「8月23日午後8時梅田駅より列車に投じて西行す。24日午前7時三田尻に着し原田保氏を訪ねて、所蔵の和同鑄型を拝見す。蓋し将に発掘せんとする長府の物に対し、予め備えんが為なり。同日午後7時長府に着し、小串旅館に投ず、次で横山氏に面会してその労を謝し、準備の次第を伺うに既に予定地の地主に対し交渉を了せられ、人夫の手当等諸事整頓せられたり、進藤師も亦奔走せらるる所ありという。

25日仏暁より発掘すべく、現場に來り見れば地は長府町の西端にして覚苑寺と、毛利邸との中間



史跡 長門銭鑄所跡

にあり、小字を逢坂と称し、狹隘にして印内川の上流に沿える所なり。旧藩士有川恒槌氏の邸宅にして、現時軍務局長菅野中將邸となれる所の西に隣接す。後方の山を準提山と呼び、往昔は鑄錢司山^{すせんじ}といいしとなり、山麓に位置したる田畑なり。凡て古代鑄錢の地は山麓にして稍平坦なる位置を多しとす。之れを周防の鑄錢司、山城の相楽郡加茂村錢司、河内枚方等に対照して、正に同一徹に出づるを知るなり。目的の地を想定して、直ちに発掘に着手す。……掘る事尺余にして、焼土及び焼灰を認む。夫れより注意して徐々に掘進む内、午前8時頃に至り、同珎2字を有せる一破片を獲たり。余先ず祝声を放ち、更に作業を進むるに、一塊、又一塊腫を次で顯われ、坩堝の破片又は送風道具たる、円形にして円孔ある陶器等を獲たり。遂に夕刻に及びて作業を止め、発掘品を整理して数うるに、錢形全きを有するもの14個、その全からざるもの及び坩堝の破片、又は轆用器等50余点の多きを算せり。実に予想外の好結果にして横山氏と共に相祝福すること極りなかりし。速刻本山社長に実況を打電し、親しく出馬せられん事を勧む。

26日勇氣前日に倍し、人夫を増加し、早朝より作業に従事す。此日収むる所亦前日に譲らず。夕刻収得品を計上すれば、錢型全きもの20個、其破片のもの28個、坩堝、銅滓その他の雜品57個に及ぶ。連日の労苦は此好成績に依りて、全然忘却して恨みなし。27日より人夫を督す。此日亦一層良好の収獲あり。夕刻再び整理計上すれば、錢の全面を有するもの27個、其破片30個、坩堝その他の破片30個ありき……28日は周防鑄錢址発掘を横山

氏と見学においており、車中本山氏と会し、作業の結



和同開珎（参考品）

果を報告している。本山氏はこの時長門鑄錢址を数時間実地視察し、周防島田の石器時代遺跡等も踏査されたと記している。29日まで発掘しその結果は次の如くであった。

錢型完全なもの	144個
其破片	220個
坩堝その他の破片	200余个

大正11年6月23日大阪府下浜寺公園の本山氏邸において和同錢鑄型発掘披露会が催された。当日は鳥居龍藏氏、内藤湖南氏、甲賀博士等が出席され「和同錢」の感想を被歴された。そして本山氏のお札の挨拶があった。…と佐野英山氏の記録に書かれている。

以上の如く貴重な発掘日記により、本学所蔵の長門鑄錢関係資料の由来が解明されたことは僥倖であった。いづれこの資料も學術誌へ紹介されると思うが、発掘日記が発見されたことにより充実した資料価値となろう。

歴史的にも著名なこの長門鑄錢址も、大森貝塚津雲貝塚などと同様、徐々に湮滅の危機にさらされている。早急に學術調査を実施し、さらに保護対策を期待するものである。



坩堝



坩堝



錢范

オシリス神小像

加藤 一 朗

目録には「鑄造小像・エジプト」とあり、陳列台紙には「エジプト古仏」とあるが、まぎれもなく古代エジプトのオシリス神小青銅像である。

この神は、特に民間において、最も広く崇拝された神で、人間的な面と自然神的な面とをあわせてもっていた。人間的な面は「オシリス神話」として伝えられている。すなわち「オシリスはかつて国民に農業・牧畜を教えた善王であったが、弟のセト神（砂漠の神）によって殺害される。そして貞淑な妻イシス女神の努力によって再度生命を獲得するが、もはや地上の王となることはかなわず、冥界の王・死者の神となる。ただし2度と死ぬことはなかった」のである。それゆえこの神の属性は何よりもまず「死・復活・永遠の生命」であり、来世の幸福を希求してやまないエジプト民族のあこがれの対象となった。またのちにこの神は、「死者の書」の挿絵で明らかなように、冥界の入口で閻魔大王のような役割をも果たすることになり、生前正しい生活をおくったエジプト人は、死後「オシリスの裁判」をパスすることによって、「オシリス神と化し、永遠の生命を獲得する」という思想が生れた。その結果冥界は無数のオシリスで充満することになる。このようなことは、一神教の浸透している欧米の人たちには理解しにくいものらしいが、「死ねば誰も仏さまになる」という日本人の考え方からすると決して不思議ではないであろう。また自然神としてのオシリスは穀物の神・ナイルの神であった。そして穀物は種として地中に埋没し（つまり、死ぬ）、のち芽生える（再生する）。

ナイル川も春に細まる（死ぬ）が夏には氾濫する（再生する）。このように自然神としてのオシリスも「死・復活」の思想と深く結びついていた。

さてエジプトの文字はまことに絵画的であったが、逆にエジプトの絵画・彫刻はきわめて「説明的」であった。ではこの小像の各部分は、何をどのように説明しているであろうか。

まず頭上にはアテフと呼ばれる複合的な冠が載っている。その中央の帽子状の部分はヘジト（白冠）とよばれるもので、上エジプト（カイロ以南）の支配者（王）の象徴である。その前面につけら

れたコブラ蛇は下エジプト（ナイル・デルタ）の王権の象徴である。ここにオシリスがかつて上・下エジプト（つまりエジプト全土）の王であったことが示されている。次に白冠の両側には左右対称的に駝鳥の羽がそえられている。

これらの羽はマアト（正義）を表わ

す。上記のオシリスの裁判では、死者の心（心臓）とこの羽とが天秤で重さを比べられ、心臓が羽と等しい重さをもつ（つまり軽い）場合、死者は正義の人としてオシリス神に化することができたのである。またあごについている、下端がやや上にそりぎみの長い付ひげは、この像が神像であることを示している。胸の上にあわされた両手には2種類の王笏が握られている。このこと自体オシリスがかつて王であったことを示しているが、右手の笏は本来牧夫の杖であり、左手のものは農夫のからざおであって、この2つはオシリスが国民に農業・牧畜を教えたことを象徴的に表わしている。両脚が離されず一本にまとめられているのもオシリス神像の特徴であって、これは「ミイラ型」とよばれる脚部の造形の方法で、死者のミイラはオシリスにあやかるように、やはり両脚を一本にまとめて、包帯で固く巻かれていたのである。

最後に足の下の方角形の突起はどう理解したら宜しいか。本像は何分小さく、恐らく神殿に奉納されたものではなく、家族信仰の対象とされたもので、この突起は、像を立たせるために、個人の家の土製または木製の神棚にほられた小孔にさしこまれたものであったであろう。いずれにしても陳列台紙に記されている「エジプト古仏」という命名はいみじくも付けられたものかなという感慨が深い。



オシリス神小像(高さ8.8cm)

桂離宮 昭和大修理の土壁調査について

山 田 幸 一

桂離宮は昭和51年春から修理工事が始まり、57年3月末に完工の予定である。離宮始まって以来の大工事で、主要殿舎である古書院・中書院・楽器の間および新御殿のうち前二者は全解体修理、後二者は解体はしなかったが屋根をすべて葺替え、破損部材の取替え・補修・補強が施された。これら殿舎に関し、屋根の葺替えや壁の塗替えは必要であっても、今後200年以上は修理を行なうことはないであろうと関係者は自負している。

ところで今回の工事に伴う調査によって、離宮成立に関する幾つかの新事実が明らかとなった。離宮は八條宮初代の智仁親王が元和年間に現地に山荘を営まれたのに始るが、主要殿舎の建築年代や建て増しの順序については異説があった。しかし調査結果では、古書院がまず現在位置に建ち、次いで中書院が、最後に楽器の間と新書院が増築されたことが明らかとなった。古書院の年代は特定できなかったが、中書院は寛永19年、新御殿は万治3年頃とされ、それぞれ二代智忠親王の婚儀、後水尾上皇の御成の時期に比定される。このうち、古書院と中書院の前後関係と新御殿の年代が明瞭となったことが特に注目される。

さて筆者は工事の全期間を通じ、土壁の技術指導を担当する機会を与えられた。従来の文化財建造物の修理では、木工事や屋根工事に比し、壁にはあまり関心が払われなかったが、今回は関係者の理解により予備調査の段階から関与することができた。調査の結果、古書院の壁は明治20年代の修理で旧来のものは取除かれ、すべて下地から更新されていた。しかし中書院・新御殿に関しては、創建時のままとされるものも相当数存在することが明らかとなった。そこで古書院に関しては今回も全く新しく取替えることとし、下地から仕上げまで現在の最高の左官工事で新しく作りなおした。

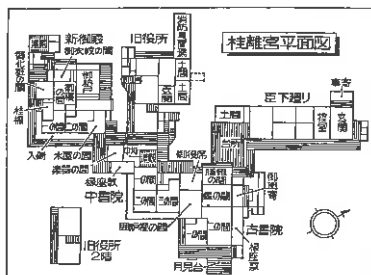
したがってこの壁は、外観は旧に倣っているが、将来は昭和の左官工事として



古書院大屋根の東妻(懸魚六葉は木製金箔貼)

記憶されることになる。一方、中書院の方は、解体時に壁を傷めないように取外し、組立時にそのまま旧位置に復するいわゆる「大ばらし工法」を採用した。壁を原形のまま取外すことは例えば法隆寺金堂壁画壁でも行われたが、その場合は取外した壁を収蔵庫に保管しており、同じ壁を原位置に復したのは今回が初めての経験である。したがってこちらの方は、解体しなかった新書院の壁とともに、江戸時代の左官工事として永久に保存されることになる。

古書院の上塗は「パラリ」と呼ぶ漆喰の一種(白色)であるが、中書院以下の上塗は「切返し」という土の肌で、ほとんど黒色に近い褐色を呈している。しかし調査の結果、この黒色は経年変化によるもので、もとは朱に近い鮮かな色であることが明らかとなった。ということは建物の完成した当初は、現在より遥かに派手な雰囲気を持っていた筈である。江戸時代初期には茶室や数寄屋に赤壁の流行していたさまが当時の文献から窺えるが、離宮もおそらくその流れに従っていたのであろう。あたかもこれと照応するかのように、古書院東妻に上っている懸魚の六葉が、いままで素木と考えられていたのに、ここに金箔の置かれていたことも明らかとなった。ブルノー・タウトの「日本美の再発見」以来、離宮は極彩色の日光廟と対置する素材の美を生じた日本建築の典型というふうに理解するのが常で、従来の離宮論は多かれ少なかれこの考え方に支配されていた。しかし以上のような新事実は、タウト以来の既成の桂離宮観に改めて見直しを迫るのではなかろうか。今回の壁の調査から得られた最大の収穫の一つであろう。



桂離宮平面図(昭和56年10月1日読売新聞夕刊より)

河内国府遺跡の旧石器

山口 卓也

大阪府藤井寺市国府遺跡は、大正6年以降、多くの調査が行なわれ、旧石器・縄文・弥生時代等の多くの遺構・遺物が発掘されている。国府遺跡の調査は、喜田貞吉氏の問題にした「大型粗石器」が旧石器かどうか、という点を明らかにするために開始された。昭和32～3年には山内清男氏らにより、ナイフ形石器を主体とする石器群が発掘され、遺跡名を取って、国府型ナイフ形石器が設定された。

国府型ナイフ形石器は、東部瀬戸内地域に広く分布し、その素材剥片の剥離技術である瀬戸内技法と共に、後期旧石器時代の日本で一つの地域性を保つ石器文化である。

国府遺跡の旧石器は、旧石器時代の研究に重要な位置を占め、ナイフ形石器の系統と編年についても、興味深いものがある。国府遺跡の実態が早急に解明されることが望まれる。

考古学等資料室所蔵の、本山彦一氏による国府遺跡出土資料には、縄文・弥生時代の多量の石器があり、これに混在して若干の旧石器が認められ

た。当時の調査が、縄文時代の人骨発掘に主眼が置かれたため、かならずしも良好な資料ではないが、その一部を紹介しておきたい。

1は、翼状剥片である。底面が自然面であり、典型的瀬戸内技法の所産ではない。

2は、楔形石器である。左側縁に、上から下に貫ける截断面を形成する。

3は、彫器である。右側縁上端に、槌状剥離を一面形成する。表皮剥片を素材とする。

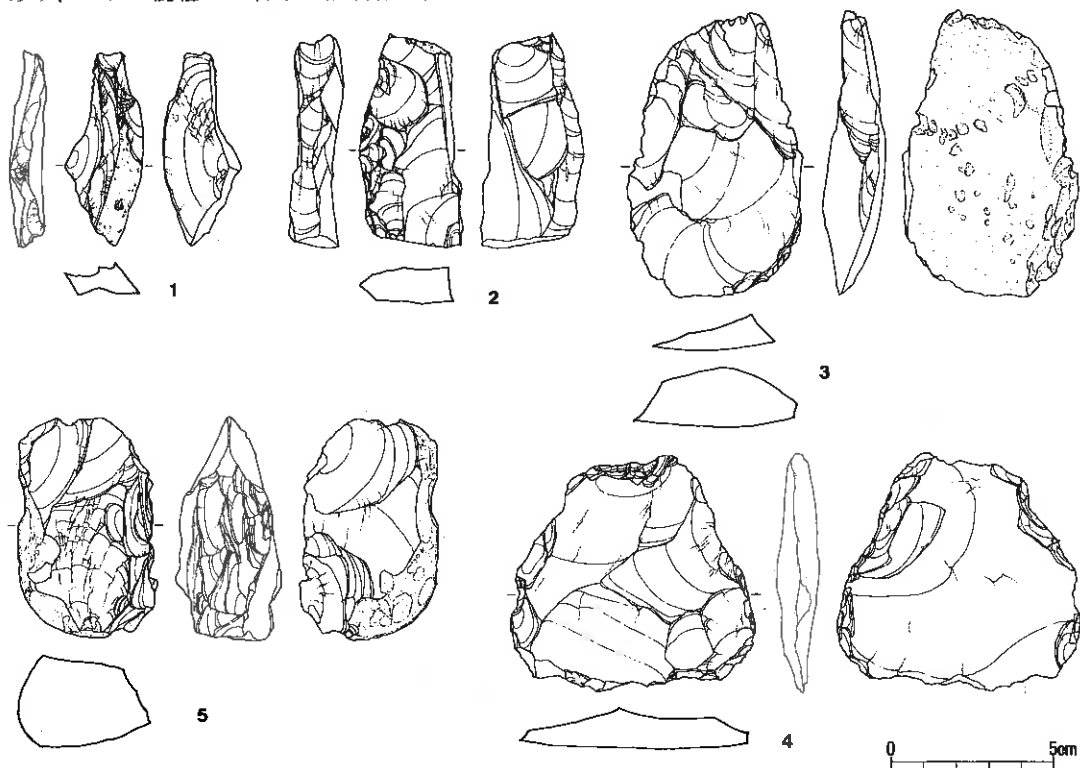
4は、削器である。周縁に小さな加工を施す。風化が著しい。

5は、横長剥片石核である。極めて厚い剥片を素材とする。剥離作業面の幅と、目的剥片の幅とが対応せず、二面の目的剥片剥離痕が存在する。

瀬戸内技法としての特徴的属性は認められず、翼状剥片石核ではない。

5点共、サヌカイト製である。

国府遺跡の旧石器は、かならずしも単一時期ではない点を、注意する必要がある。



国府遺跡の旧石器実測図

続 インカ・マヤと飛鳥の石造物

猪 熊 兼 勝

飛鳥の石造物で有名な「酒舟石」は、花崗石の巨石の表面、石の東端を起点として円形の窪みを彫り、幅10cm、深さ5cmの直線で結ぶ樹系図のように放射状の石である。その用途は饗宴用の導水の装飾石である。丘陵傾斜面に枕石を置き、流路のため酒舟石を西へ5度傾斜する位置で固定する。

昭和10年、酒舟石の南斜面上で土留めに使われていたとされる「車石」が15個掘出された。車石は長方形をした花崗岩の割り肌を利用して平滑にし、1条の直線に彫込んだ溝である。

大正7年、真神原の西端、飛鳥川に面した東岸から、もう一つの酒舟石が出土した。この年台風による大洪水があり、豊浦では家屋7軒が流水した。この大水によって酒舟石が露出したと思う。丘陵上にある酒舟石は車石に接続して、丘陵西端まで導水し、さらに真神原の平坦地を西へ200m導水させたのであろう。

ペルー、アンデスのインカ時代後期の遺跡として有名なマチュ・ピチュには飛鳥の車石に酷似した、というより「ウリ2つ」のインカの車石がある。飛鳥の石と同様、石の表面を平滑にし、その表面に酒舟車石と同寸法の直線溝を彫っている。マチュ・ピチュは山岳遺跡のため丘陵斜面を階段

状に石積建物群がある。この建物群にそって一辺約1mの方形石壁があり、この中へ導水施設が続く光景は、さながら高層マンションの段違いのベランダを見るようである。雨期には、この車石に雨水が流込むのか、流水痕跡がある。この施設を王者のシャワーとする説明があるが、ラセン状に迂回しながら山の下へ降る水の流れは、単なる浴場以前の用途があったのであろう。不思議なことにマチュ・ピチュの頂上には水源はない。はるか400m下のウルバンパ川の水をどのようにして汲上げたか判らない。高さ5mの丘陵上にある酒舟石について、庭園装飾用の導水説を説明すると、誰もその水源について質問がある。かつて、酒舟石の北に小さな飛鳥池があった。吉野十津川分水ができたため池が不要となり、運動場となったが、この池は灌漑用の池であった。この用途の池となる以前、小池があったのであろう。

1911年ビンガムによってジャングルの中より発見されたマチュ・ピチュは現在も発掘が進められている。飛鳥とインカの遺跡とは直接影響しあわないが、地球の両端にある文化を比較することによって各々の用途がより鮮明になり、機能を論証する手だてとなる。



酒 舟 石



酒舟石の車石



マチュ・ピチュの車石



マチュ・ピチュの導水施設

パプア・ニューギニアの民俗資料

本学資料室にパプア・ニューギニア地方の民俗資料約100余点を所蔵する。主にアガッツ地区収集のものが多く、この資料は旧本山コレクションの一部と、昭和43年東京の材木商小宮山貞夫氏より横田健一教授を通じて贈られたものである。

トーテムポール、大鼓・棍棒、櫓、神像、仮面、袋物などの資料であり、ニューギニア原住民の生活を知る上で貴重な資料である。

①は矢であり、弓矢が主要な武器・狩猟具として使用されている。とがった木製のものは戦闘用、竹製のものは野ブタなど大型の野獣の狩猟用である。②は神像で人形や仮面が伝統的に残されており、祖先像として崇拝され、また海に流して死者の霊をとむらうのにもちいられた。③はミクロネシア・モートロック諸島の仮面で、祭祀や踊りの際に神の姿に変装するための仮面である。男女二面のセットになっており、この仮面は女神をあらわす。また戦争などでは守護神としてまつられた。

家屋内の柱に男神と女神を向かい合わせにかけ、呪文を唱えて戦勝を祈願した。パンノキなどやわらかい木でつくられ、石灰製の白色塗料とココヤシ殻を焼いてつくった黒色塗料で彩色をほどこしている。

④は櫓であり、ニューギニアには多くの河川が

網目状にあり、丸太をくりぬいたカヌーは漁撈のほか交通手段、運搬用として重要である。この航行には、棹や櫓をもちいる。櫓の表面には曲線模様や、祖先像、動物の文様を描いている。人面などの彫

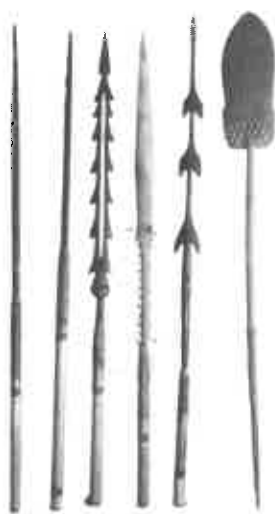
刻もある。石貨は上層階級への昇進のための上納金、祭祀の際の献金、カヌーや家屋の建造にたいする謝金としてもちいられる慣習上の貨幣であり、直径の大きなものと、来歴のわかっている石貨は重要視された。(国立民族学博物館総合案内参照)

海外民俗資料は現在のところこの資料のみであり貴重である。これら関連資料の収集を早急に行なわなくては、永遠に消滅してしまうであろう。

なぜならば文明社会の侵食により、カヌーはエンジン船に、また原住民の生活は大きく変化している。教会や学校ができて変貌を来たしており、民俗資料も次第に失われつつある。早急に学術調査を実施し、民俗資料の収集と記録を残さなければ後々悔いを残すことになる。 〈角田芳昭〉



石貨(直径18cm)



①



②



③



④



明器 (井戸)

中国古代の葬送儀礼に副葬品として多くの

明器が祀られている。明器は神明の器であり、青銅彝器その他、礼につかう神聖の器はみな明器である。墓中に副葬する習俗は既に殷代の頃からあったと考えられる。特に人像を俑とよぶ。

戦国時代は黒陶俑という10～20cmぐらいの土偶があり、動物、鏡、帯鉤、耳杯、などがある。漢代には帝室の明器をつくるために東園匠という役所がおかれ「後漢書」礼儀志に飲食器、樂器、かまど、井戸などの明器のリストがしるされている。

写真は漢代の井戸明器であり、青龍、白虎、朱雀、玄武の四神を配している。灰色の素焼であり、高10cm、横23cmである。井戸は屋形をかけた車井戸があり、方形、円筒形の井戸側や、流し付もある。唐代では漢代に比し器物の明器はすくなく、俑、動物が多い。唐三彩は中国明器の花である。明器製作の伝統はその後、明清代まで残っていることが発掘からも明らかである。

刀銭

本学所蔵の「古銭」の中に中国古銭800余点があり80数種に分かれる。

古代中国において、いまだ貨幣が鑄造されない時期は、子安貝（寶貝）を貨幣として使用しており、殷代の実物が多量に残っている。

貝の字は子安貝を象って 𧇵 𧇶 など書き、貝はお金なる故、財、貨、資など貝のつく文字は財産に関する。貝を分けると貨となるのも道理である。また貝は礼物にも使用されたので賞、賜、賁などの例も見られる。中国上古の貨幣中、今日存するものは貝幣、銅幣、布幣、刀貨、錢貨の5種である。

右は齊刀銭であり「齊」の国の刀銭で、田氏の発行したものである。陽面は齊化とあり、化は法であり、化は貨の意味であろう。陰面は「行」と刻されている。左は明刀銭で、刀の面に「明」の文字があることにより名付けられ、燕の国のものといわれる。背文は一二三、十千、十二支等諸々の文字が刻されているが、本学のものは「八」と刻している。



資料紹介

好大王陵埴

この長方埴は墳墓内部の壁面に使用されたか、瓦とともに墓室の構築に使用されたものと考えられる。縦29cm、横16cm、厚さ2.2cmの扁平な長方形であり、朱墨で「奉天省(盛京省)輯安県洞溝、好太王陵墓発掘品」と記されている。高句麗の廣開土王周辺の墓陵より出土したものであろう。かなり堅緻な焼成であり、両短側面の中央から左側が切り欠かれているので、長側面は六角形を呈する。恐らく使用上の目的で切ったのであろう。その長側面の一辺に「願太王陵安如山固如岳」の10文字が隷書体で陽刻されている。

「願はくば太王の陵の安きこと山のごとく、固きこと岳のごとくあらんことを」と永劫を祈ったこの古墳の主については2説があり、定まっていない。太王陵と廣開土王碑とは至近距離にあり、この願文の条埴が多々出土している。また「千秋万歳永固」と書かれた類例の埴も多数出土している。高句麗時代遺物。



甲骨文字

ト（うらない）の亀甲獣骨にきざまれた殷代の文字で、刀で直接ほられた細密で直線的な字画をもった文字である。先年伊藤道治先生に解説願ったので、ここに紹介する。この資料は故本山彦一氏旧蔵で、明治末年から大正初年に入手されたと推定され、1904年殷墟小屯村北の朱家所有地から盗掘された甲骨文字の一部であると考えられている。

甲骨文字の研究は現在第5期に分けられ、祭祀、風雨、方国、吉凶等をうらなっている。本学には第1期10片、第2期8片、第5期4片の甲骨を所蔵している。

この資料は第1期のもので上片は「①辛卯ト、由貞、出干𠂔。(左行) ②甲午ト、賓貞、今春畢」と書かれ、「辛卯の日にトい由が貞う、𠂔に出せんか、甲午の日にトい、賓が貞う、今春に畢せんか。」と読む。下片は「①成寅の日にトい、賓が貞う、乎んで牛を取らしめんか。(右行) ②甲午の日にトい、𠂔が貞う、汙貳が来らんか。(左行) と読まれ、いずれも牛骨である。



資料紹介

夢一言

昭和50年秋、考古学陳列室を学生・教職員に公開してより、本日（昭和56年10月18日）の校友総会の見学者約300名を加え、見学者が2,000名を越えた。考古資料の充実さ、質の高さに比し、施設の狭隘さに多くの人が驚かれる。何とか早急に全資料が陳列出来る施設が建設されたなら、素晴らしいであろうと校友の方々のご意見であった。

本学に中央図書館が建設されたならば、現在の図書館の円型閲覧室の部分を改装し、博物館として残していただけたら、誰もが納得する再利用方法ではないだろうか。関西大学100周年記念事業の一環に、ぜひとも実現していただきたいと熱望するものである。

◆ 資料貸出状況

- 56.9 須恵器（大阪府南河内郡狭山西山窯出土他）30点
大阪府南河内郡狭山町立郷土資料館
- 56.10 石棒6点、独鈷石10点、石冠4点、御物石器1点、
青龍刀石2点、石刀4点
至文堂発行「日本の美術」（縄文時代Ⅲ）掲載
- 56.10 爪形文深鉢型土器（大阪府国府遺跡出土）
講談社発行「縄文土器大成第1巻」掲載

編集後記

学内にも秋がしのび寄り、菊の大輪も真近か、学生達も大学祭の準備に忙しい。

今回は昭和の大修理といわれる「桂離宮」の土壁調査に参加された、工学部山田幸一教授にお願いし原稿をいただいた。ここに感謝申し上げる。また例の如く横田、網干、加藤、猪熊の諸先生方にも依頼し、おかげで第4号の発行にこぎつけた。

本学に博物館学課程が昭和36年に開講されて20周年となるので、これを記念し「阡陵」の

特集号として、20周年回顧の記念論文集を発刊することとなった。57年2月頃発行の予定である。

表紙の人物埴輪は茨城県那珂郡東海村出土で、衝角付冑を着装する。冑は横矧鋳留の形式で、紙は円形浮文を貼りつけて表現し、鋳は寛で格子文を描き、顔面に赤色顔料で三角形を画いている。これは死者の靈魂を鎮めようとして行なわれたものといわれ、6、7世紀の関東地方出土の人物埴輪に類例が多い。非常に写実的で、わが国人物埴輪の中でも秀作に数えられるものである。〈角田芳昭〉